

都城市文化財調査報告書 第15集

都之城取添遺跡発掘調査概報

1991

都城市教育委員会

都之城取添遺跡概報 正誤表

頁	行	誤	正
1	12	文和元年 文和初年	永和元年 永和初年
3	4	矢部喜多男	矢部喜多夫
5	6	規距性	規矩性
5	12	混灰オリーブ色土	灰オリーブ色土
7	表-4	壺 皿耳壺	壺 四耳壺
9	14・25	第IV期	第II期
9	16・26	第V期	第IV期
13	(読み下し)	ただいま参着候。	ただいま昼参着候。

序

都城市文化財調査報告書第15集をここに刊行いたします。

本遺跡は「都之城」の一角である「取添」について、その発掘調査の概要を報告するものであります。

調査は、医療法人仁愛会・横山病院の新築工事に伴い実施したものですが、調査対象区域は建築部分のみに限定され、この中に前建築物の基礎等が残存していたために、極く一部分に留まったものであります。

調査にあたっては横山病院 の文化行政に対する積極的なご理解により、都城市教育委員会が行ったものでありますが、特に同氏の全面的なご協力に対して、心より謝意を表するものであります。

また、発掘調査に際しましては、調査計画・実施、更に報告書の作成に専身的にご協力いただいた都城市文化財専門員・重永卓爾氏に負うところが極めて大きく、共に発掘作業にご協力いただいた地元の皆さんにも、心からお礼を申し上げたいと存じます。

遺跡からは、当地方における中世の様子を知る上で貴重な資料が出土しており、この調査資料が今後の都城盆地の歴史解明の一助となることを期待しまして序文とします。

平成3年3月

都城市教育長 久味木 福 市

例　　言

- I 本書は、医療法人仁愛会・横山病院による新築工事に伴う、緊急発掘調査の概報である。
- II 取添遺跡は都城市都原町506番地に所在する。
- III 発掘調査は都城市教育委員会が実施し、その期間は1990年5月22より開始され、同7月20日をもって終了した。
- IV 出土遺物のうち、舶載陶磁器類・肥前系陶磁器類については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏のご助言指導を仰いだ。また土壤（プラントオパール）に関しては、宮崎大学農学部教授藤原宏志氏に委嘱して分析中である。
- V 本書掲載の写真は遠矢・重永が分担して撮影し、執筆編集は重永がこれに当った。
- VI 出土遺物・記録類は、都城市教育委員会が収納保管して整理中である。
- VII 発掘の調査組織は次のとおりである。

調査委託 医療法人仁愛会・横山病院

調査主体 都城市教育委員会

調査責任者 都城市教育長 久味木福市

調査事務局 都城市教育委員会

　　文化課 課長 成竹清光

　　〃 課長補佐 遠矢昭夫

　　〃 主事補 田部井寿代

調査担当者 都城市文化財専門員 重永卓爾

調査補助員 持永富士男

都之城取添遺跡発掘調査概報

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査概要	3
1. 確認調査（試掘調査）	3
2. 発掘調査	3
3. 層序	3
4. 造構	5
5. 遺物	7
III まとめ	9

口絵・挿図目次

口絵 1 取添遺跡航空写真	
口絵 2 都之城古絵図の取添部分	
口絵 3 天目茶碗	
口絵 4 赤漆片・赤絵皿片・銅製品	
口絵 5 石造塔婆部分	
口絵 6 伊集院忠棟・同忠真書状	
第 1 図 取添遺跡周辺の地形図	2
第 2 図 取添遺跡調査区および造構分布図	4
第 3 図 5号土坑（SK5）平面・断面図	6
第 4 図 1号堅穴造構（SC1）平面・断面図	6
第 5 図 主な出土遺物	8
第 6 図 都城縄張り図	11
第 7 図 伊集院忠棟・忠真文書の封紙・本紙封復元図	12

表 目 次

表-1 溝状造構の規模	5
表-2 溝状造構掘形の諸類型	5
表-3 土坑の規模	6
表-4 出土遺物観察表	7
表-5 日向・薩摩における古城址「取添」一覧表	10

図版目次

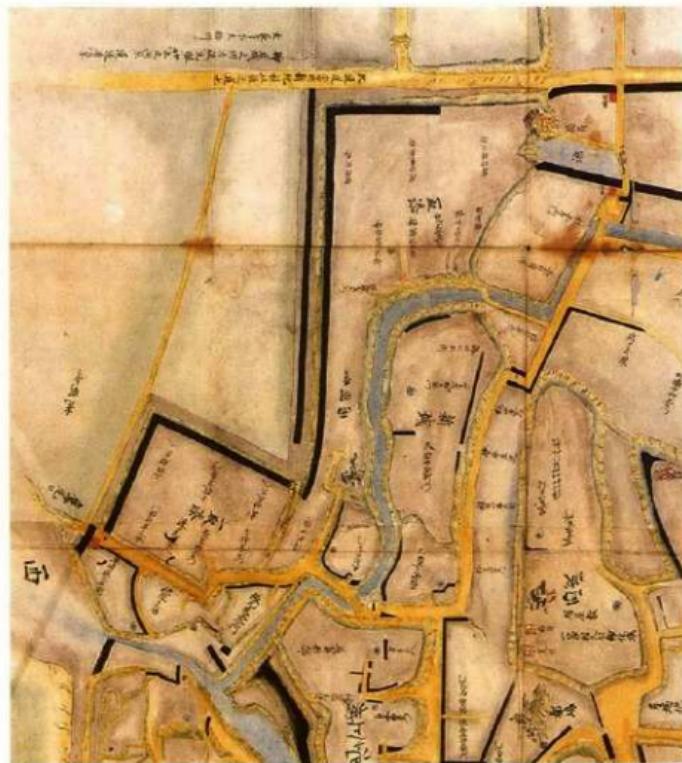
- PL. 1 調査区遺構完掘状況航空写真
PL. 2 タ
PL. 3 タ
PL. 4 タ
PL. 5 検出された近世の柱穴列・中世の歓遺構
PL. 6 土坑-5内の集石・1号溝
PL. 7 ピット群の検出状況、豎穴遺構-1
PL. 8 大溝 1・2の切り合い、大溝-2覆土中の板碑
PL. 9 出土遺物 繩文式土器・かわらけ類
PL. 10 タ 船載磁器(青磁)
PL. 11 タ タ (青磁)
PL. 12 タ タ (白磁)
PL. 13 タ タ (青花文)
PL. 14 タ タ (タ)
PL. 15 タ 船載陶器(褐釉)
PL. 16 タ 陶磁器(中世)
PL. 17 タ タ (近世)
PL. 18 タ 石製品
PL. 19 タ るつぼ片・鉄製品

附録

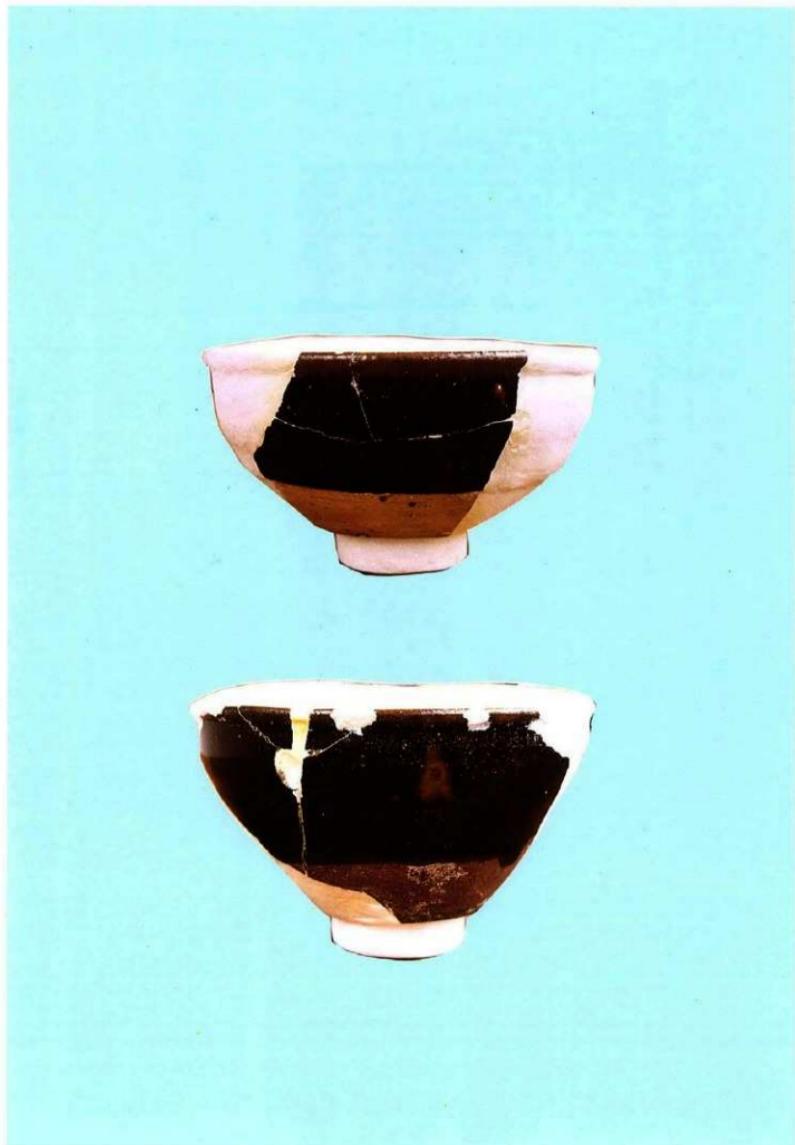
1 伊集院忠棟書状	12
2 伊集院忠真自筆消息	13
3 光明寺本堂定香箱銘写	14
4 光明寺三宝荒神像銘写	14
5 西明寺梵鐘銘写	14



図版1 取添遺跡航空写真（北側上空より）



図録2 都之城古絵図の取添部分（都城島津家所蔵）



口絵3 天目茶碗（瀬戸・美濃系）



図絵4 赤漆片・赤繪皿片・銅製品（錢貨・毛拔状製品・煙管吸口）

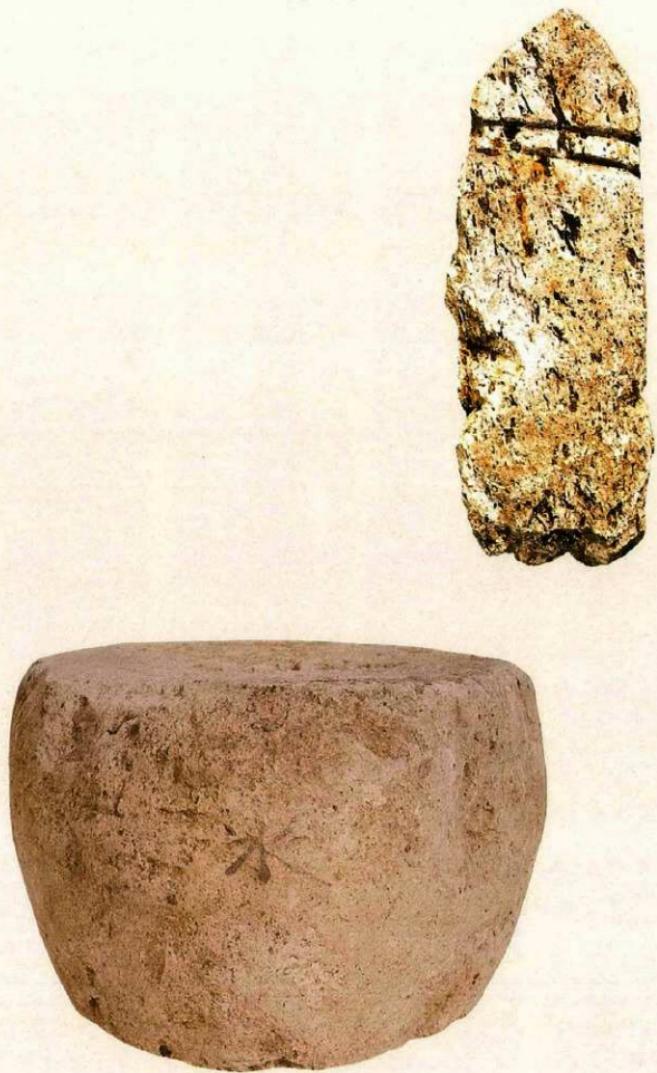


図5 石造塔婆(上:軽石製小板碑, 下:五輪の水輪部「水」の墨書あり)

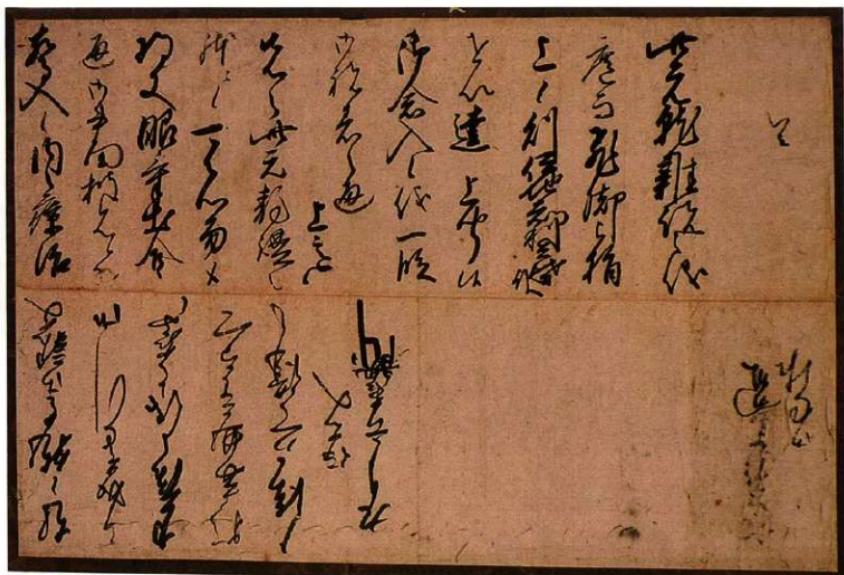


図6 伊集院忠棟書状、同忠真自筆消息（都城島津家所蔵）

I. 遺跡の位置と環境

取添遺跡は宮崎県都城市都原町506番地（字、取添）に所在する。当遺跡は都城盆地の東縁、虜尾・蓑原台地と大淀川の北流する右岸台地の西縁に位置する。この台地と周辺低地との高低差はおよそ23mを計り、標高は161.00～161.70mの間である。

取添は都之城（本丸、曲輪I）の北西縁の曲輪を形成する名称で、これは2箇所存在するが、いま便宜、從来調査の曲輪番号に準じて「取添（曲輪XI）」・「取添（曲輪XI'）」とする。前者が調査対称の遺跡であり、後者は現在その過半は住宅地となっている。曲輪XI内の北東縁にはかつて稻荷社があり、その下には稻荷池が存在して、近世には都城銘酒「稻荷山」の由来の地でもあった。またその南側には西明寺も建立されていた（註1）。都之城（本丸）を中心として南側には龍峯寺跡（島津家墓地）や竹下橋より西方には、兼喜神社が鎮座するなど、この近辺には都城島津家ゆかりの中世・近世の史跡が多い。

都之城の沿革は一際ならずであり、当初宮丸氏の居館があったという説（註2）、都城島津家二代北郷義久が文和元年（1375）創建説（註3）などあるが、何れも確証はない。ただ文和の初年頃に地名・城名としての「都城・都之城」など信憑性の高い資料にはこれが頻出してくれる（註4）のが注目される。また文明6年（1474）前後には、都城は島津氏本宗の所領（御料所か）になっていたようである（註5）。降って戦国期天文年間には、十代北郷忠相は盆地統一を達成したが、彼は從来の都之城の城域を拡大整備したと伝承される（註6）。

ともかく当城は南北朝より文献に散見され、守護・戦国大名島津本宗家の北方経略の堡垒としての大きな役割を担った。其後、天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州遠征の際には、北郷時久が籠城戦を展開し、島津氏降伏後の文禄4年（1594）8月には、時久・長千代丸（忠能）は那答院（宮之城）に改易となり、変わって伊集院忠棟の居城となったが、この伊集院氏時代に取添は構築されたといわれている（註7）。また忠棟が伏見で横死を遂げ、世にいう「庄内合戦」が勃発し、息源次郎忠真が慶長4年（1599）3月より更に本城および十二外城を修築したという（註8）。この事変も翌慶長5年（1600）2月末には終結し、伊集院氏は薩摩国頼桂郡一万石に転封され、其後は北郷氏に旧領が復されたが、元和元年（1615）閏3月徳川幕府の一国一城令に従い、当城は破却され終焉を迎えた（註9）。

註

1 「都之城古絵図天和2年写」都城加塙家所蔵。『莊内地理志』卷之二十七。

2 『当家御旧例覚』都城島津家所蔵。『莊内地理志』卷之六十六・六十七。

3 前掲書他。

4 『山田聖栄稿』都城島津家所蔵。

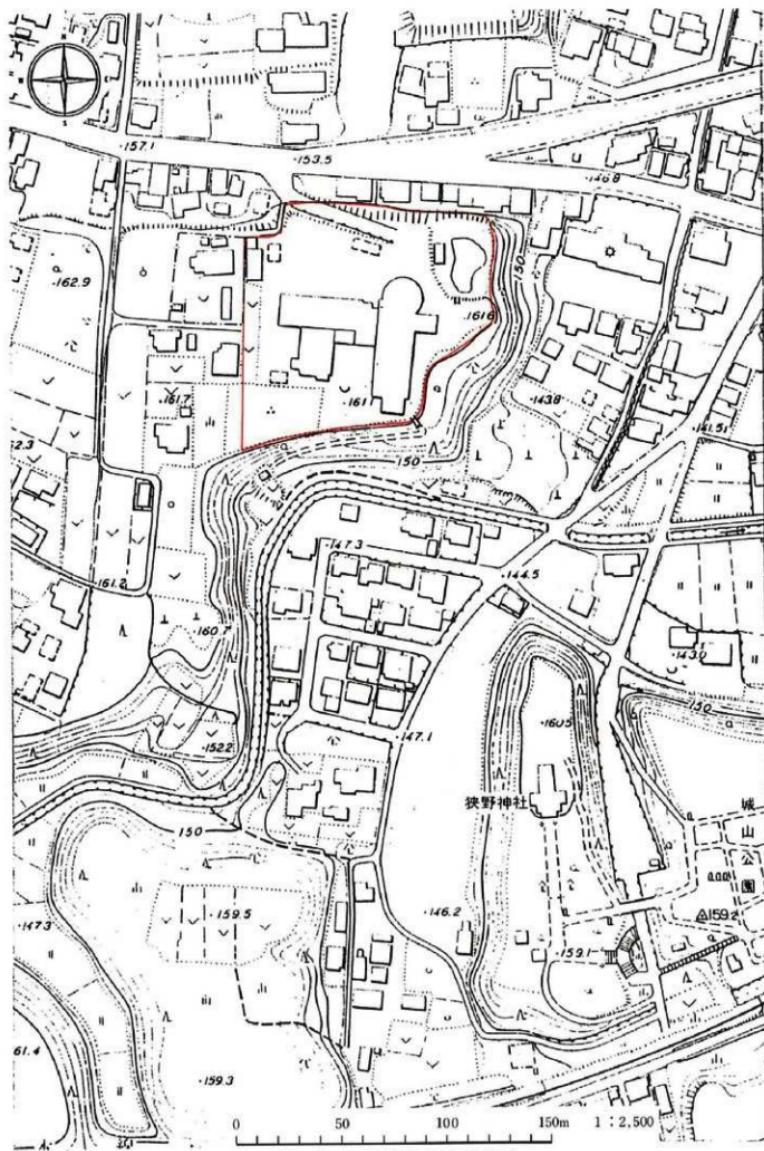
5 『行脚僧雑録』文明六年、都城島津家所蔵。

6 『有田村監記』内題「古物語」、都城島津家所蔵。

7 前掲『当家御旧例覚』他。

8 『島津国史』卷之二十一。

9 註2と同じ。



第1図 取添遺跡周辺の地形図

II. 調査概要

1. 確認調査(試掘調査) 平成2年4月、取添遺跡に医療法人仁愛会・横山病院の新築工事(延3,773m² 鉄筋コンクリート2階建)が施工されることとなり、都城市教育委員会では、該地が都之城の1曲輪としての遺跡の重要性にかんがみ、同会の協力を得て、工事に先行して当遺跡の確認調査をすることとなり、同市文化課主事矢部喜多男が、同年4月23日~27日(5日間)試掘調査を実施した。

これは2×2mのトレンチ7箇所を設定、第2TよりPitや御池ボラ層面に溝状遺構らしきもの、また各Tより少量ではあるが14~16Cの舶載青花・カワラケ・軽石などを採集したが、旧建造物跡は完全に破壊されていた。しかし周辺部には遺構・遺物検出の可能性があるものと判断し、工事により完全破壊される施工区1,500m²を、緊急発掘調査(記録保存)し、他の施工区域外は簡易舗装工事のため現状保存の措置をとることに結着した。

2. 発掘調査

上記の報告に基づき、教育委員会より筆者が発掘調査を委嘱された。調査は平成2年5月22日より開始し、同年7月20日その作業を終了した。

調査区域は既に施工区域の基礎部分に鉄筋が埋設され、水糸が張りめぐらされており、また戦後に建設されたレジャー・ハイツの跡地でもあり、作業は当初より幾多の困難が予想された。

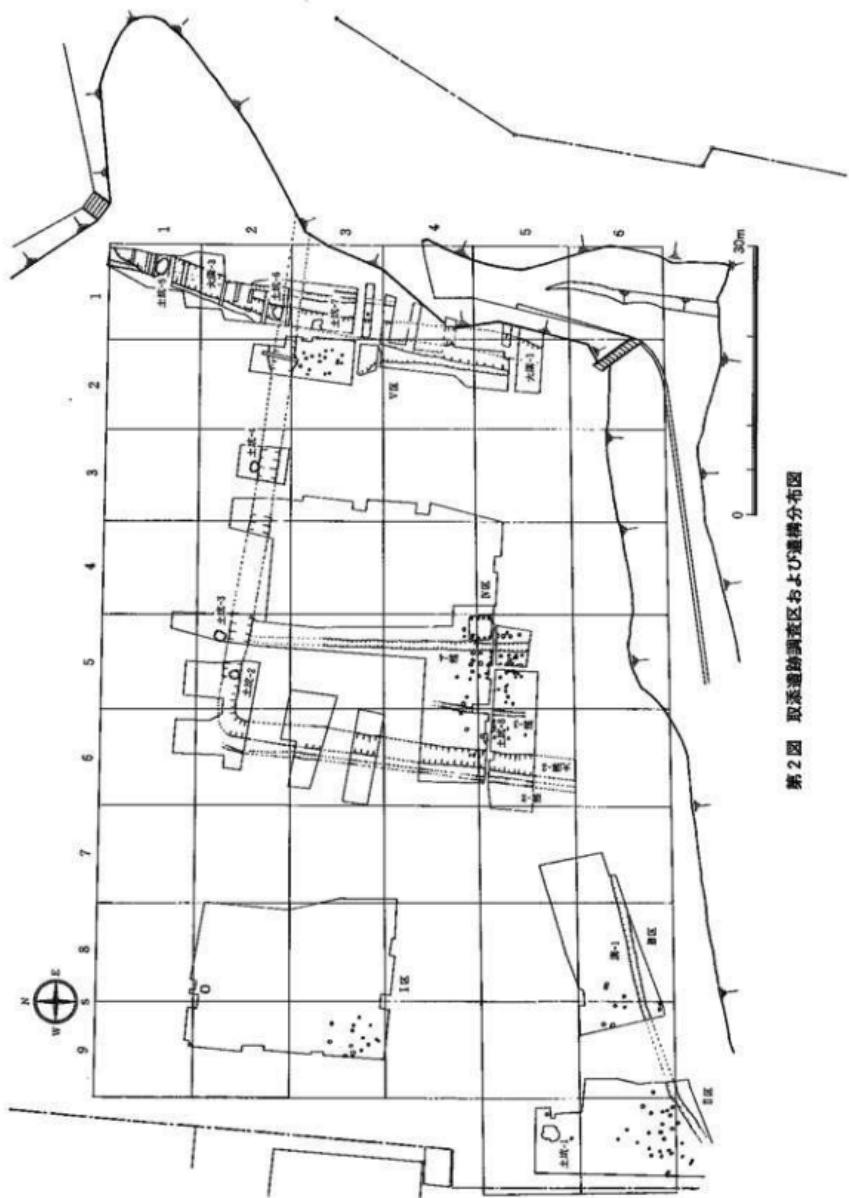
調査は当遺跡調査区の北東端を原点として、方位を磁北線に一致させ、10×10mのメッシュに区画するグリッド法とし、原点よりE→W、N→Sにそれぞれ算用数字をもってこれを標示した。

3. 層序

当遺跡の層序は、大部分が戦前の陸軍の構築物、および戦後のレジャー・ハイツなど建造物の残骸や廃棄物の穴などによって大破壊をうけていたが、周辺部の若干の良好な層序は次のようにある。

- 第Ⅰ層：表土(耕土)
- 第Ⅱ層：白ボラ(文明8年桜島を起源とする降下軽石)
- 第Ⅲ層：黒褐色腐植砂質土
- 第Ⅳ層：オレンジバミス混入茶褐色土(漸移)
- 第Ⅴ層：御池ボラ層
- 第Ⅵ層：漆黒粘質土層
- 第Ⅶ層：アカホヤ層
- 第Ⅷ層：明黒褐色シルト層のごとく堆積して下層に推移する。

遺物の包含層はⅢ層が主で、遺構の確認面はⅦ層御池ボラ層が殆どである。なお調査区は便宜に施工区配置(建設予定地)に従い、I~V区の五区分とした。



第2図 取扱遺跡調査区および遺構分布図

4. 遺構

溝状遺構 (SD, PL. 1~4, 6~8)

大小 7 条の遺構が検出された。時期は A I は 13C 後半より E II は 16C 代にわたる。要括すると下表のとおりである。

遺構No	規模 (m)			検出全長 (m)
	上 幅	底 幅	深さ	
SD 1 (L) (1号大溝)	4.23~2.14	2.00~1.80	1.30	28.00
SD 1 (S) (1号溝)	0.70~0.63	0.40~0.28	0.74	38.00
SD 2 (L) (2号大溝)	2.80~2.30	1.00~0.72	0.75~1.40	80.00
SD 2 (S) (2号溝)	0.75~0.53	0.43	0.30	33.50
SD 3 (L) (3号大溝)	2.80~2.40	0.90~0.67	1.65	18.00
CSD 3 (S) (3号溝)	0.66~0.68	0.22~0.20	0.41	9.00
CSD 4 (S) (4号溝)	0.78~0.72	0.43~0.41	0.52	22.00

表-1 溝状遺構の規模

ピット群 (SP, PL. 1~5.7)

I~V 区に分布している。このうち I~III・V 区の Pit の分布は規距性をせず、覆土はすべて II・III 層混入の B タイプで、部分的には Pit (掘形) の基底部が固く、オレンジバミス少混の暗褐色で、軽石を埋置

したものも見られる。IV 区の Pit は近世・中世 (2 時期) に分類可能な数種の掘立柱建物の柱穴掘形と推定される。Pit の填土を分類すると、A タイプ：オレンジバミス混入暗褐色土 B タイプ：径 2~3 mm の白ボラ混入暗褐色土 C タイプ：白色シルト混入混灰オリーブ色土となる。

豊穴遺構 (SC 1, PL. 7)

IV 区の V 層上面より 1 基を確認した。棟の主軸は真北で、2.45×2.31 m、深さ 0.28~0.40 m を測る方形プランである。壁下に斜溝がめぐり、その幅は 0.10~0.14 m、深さ 0.10 m を数えるが、東壁下のそれは不明瞭である。柱穴掘形は南北の両壁間に沿って 4 箇づつ穿たれていた。覆土はオレンジバミス混入の黒褐色土層で 3 層に分かれるが、II 層より 15C 末の青花蓮子碗の小片 1 と下層より青磁小片・糸底切でクロ口痕のカワラケ小片 2 箇を検出した。

畝状遺構 (PL. 5)

I 区の II 層下より検出された。南北に列状の小溝がほぼ同間隔で走行しており、それには文明白ボラが堆積していた。これは東西 14.0 m、南北 19.0 m 残存し、中世の畑の畠と推定された。畠幅は 0.68~0.78 m の間隔で小溝の幅は 0.3 m、深さは 0.13~0.14 m を測る。

類	型	横断面形態模式図	特徴
A	I		SD 4 (S)。埋土はオレンジバミス少混入暗褐色土。鉄石製石鍋片。須恵器片出土。輪状を呈する。
	II		SD 2 (L), SD 1 (S)。北側は道路跡で、底に灰黒状の埋入土軸に直交。底部に小溝が走行。底部、周辺部、Pb 含量、酸化して黒い。埋土は同上に白ボラ地盤。
C	I		SD 2 (L) の北東部。埋土の上部に白ボラ地盤層で、下部は複雑な白ボラ。底は凹状で、基底部よりやや斜面を有する。Pb 含量がある。14C 後半~15C 末のカワラケ・船底器・鐵刀・鐵矛等の鉄器出土。
	II		SD 1 (L) の南端部。埋土は埋土で中世の礎化面あり、埋土は鉄器化。基底部よりやや斜面を有する。Pb 含量がある。14C 後半~15C 末のカワラケ・船底器・鐵刀・鐵矛等の鉄器出土。
D	I		SD 1 (L) の東部。埋土は埋土で中世の礎化面あり、埋土は鉄器化。基底部よりやや斜面を有する。Pb 含量がある。14C 後半~15C 末のカワラケ・船底器・鐵刀・鐵矛等の鉄器出土。
	II		CDS 3 (L) 同上。下面より 15C 末のカワラケ、1 面底より 16C 前半の骨壺鏡など検出。
E	I		SD 5 (S)。埋土は白ボラ混入暗褐色土。16C 代の船底器出土。
	II		SD 1 (S)。埋土は暗褐色土。埋土はオレンジバミス混入褐色土。白色シルト。鉄片間に埋入しか 16C の船底器出土。

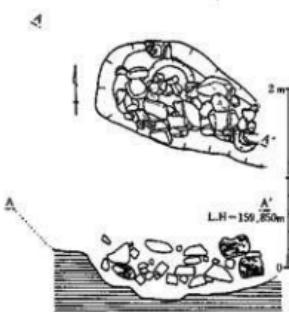
表-2 溝状遺構形形の諸類型

土坑 (SK, PL. 6)

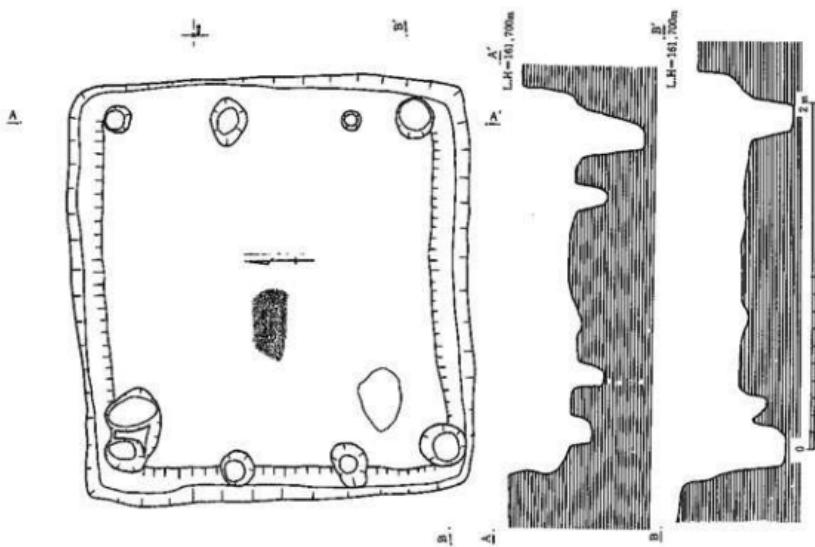
8 基を確認した。検出面はV層上面かSD 2 (L)・SD 3 (L)などの覆土中である。その殆どに軽石が存在し、填土は白色シラス混入灰オーリーブ色土で、それぞれに15C末～17C初頭のカワラケ・備前焼擂鉢・船載青花皿片などが少量づつみい出された。

遺構No	規 模 (m)			備 考
	長 広	幅 經	深 さ	
SK 1 (1号土坑)	2.14	1.56	0.35	軽石漂部に沈堆
SK 2 (2号土坑)	1.10	0.93	0.69	覆土に軽石 青花・漆器
SK 3 (3号土坑)	1.07	0.88	0.48	地上に軽石 鉄製品出土
SK 4 (4号土坑)	1.15	0.87	0.28	覆土に軽石
SK 5 (5号土坑)	2.00	1.13	0.50	地1・2次硬化面を切る。覆土 に軽石・青花瓶・土器・石 製瓦輪軸の水輪2・馬糞輪1
SK 6 (6号土坑)	1.15	1.35	0.63	覆土の軽石浮く感じ カワラケ・青花
SK 7 (7号土坑)	1.78	0.96	0.54	覆土に軽石 第一次硬化面下
SK 8 (8号土坑)	1.04	1.04	(未測)	覆土に軽石

表-3 土坑の規模



第3図 5号土坑(SK 5)平面・断面図



第4図 1号竪穴造構(SC 1)平面・断面図

5. 遺物

各区包含層・造構より出土した縄文土器・土師器・須恵質土器・國產陶器・船載磁器・陶器の主なものを表示すると次のとおりである。

土器・陶磁器 (PL. 9 ~ 16)

開拓No	種別	器種	出土区場 遺構	測定 寸法 (cm) 口径 底径 高さ	等 標	備 考	開拓No	統計	器種	出土区場 遺構	測定 値 (cm) 口径 底径 高さ	特 徴	備 考		
PL. 9	土器	甕	5-5-I	-	-	内側内側 のミガキ	PL. 12 ⑤	白磁	杯	9-3	-	-	縦反り	16C	
①	土器	甕	3-2 陶器下 SD1(L)	8.1	7.8	1.8	14C 後半 変形	⑦	甕	6-3 SD 2 (L)	-	-	+	16C	
②	+	甕	白ボウ下 SD 2 (L)	-	7.7	-	赤切り底	14C 後半	⑥	甕	1-3 SD 1 (L)	11.4	6.5	3.0	灰白色 粗面
③	+	甕	1-1 SD 2 (L)	-	6.0	-	赤色ナマ面 SD 2 (L)	15C	⑧	甕	2-4 SD 1 (L)	(11.0)	6.0	3.6	浦反り
④	+	1-1 SD 3 (L)	-	7.4	-	-	赤切り底	15C	⑨	甕	10-5 S.K.	(11.0)	12.0	3.1	呑口底 17C 初頭
⑤	+	1-2 SD 6	11.0	9.5	(3.3)	-	白ボウ下 SD 6	15C 後半	PL. 13 ⑪	花瓶	1-4 SD 1 (L)	(13.0)	-	-	圓底 15C 後半 変形
⑥	+	1-1 SD 1 (L)	9.0	8.0	(2.0)	-	赤切り底	16C	⑫	甕	7-6	-	(9.0)	-	高台斜面 15C
⑦	+	1-3 SD 1 (L)	-	5.0	-	-	赤面刷毛、端 付付	16C	⑬	甕	10-5 S.K.	(13.0)	(4.0)	5.1	電子写真 花 15C 後半 中頭
PL. 10	青磁	皿	2-5	-	6.0	-	赤陶法 SD 1 (L)	12C ~ 13C	⑭	甕	1-3 SD 1 (L)	(14.0)	6.0	7.6	14C 後半 16B 前半 中頭
①	+	碗	2-6 SD 1 (S)	-	-	-	赤陶法 輪外付蓋入	14C 後半 中頭	PL. 14 ⑮	花瓶	2-3 SD 1 (L)	(9.0)	-	-	片口底 16C
②	+	5-5-II	12.0	-	-	-	-	15C 中頭	⑯	甕	2-2 SD 1 (L)	-	-	-	淡茶色
③	+	1-4 SD 1 (L)	(15.0)	-	-	-	端反り 淡黃茶色	-	⑰	甕	8-3	-	-	灰オリーブ 16C	
④	+	白ボウ下 SD 2 (L)	(15.0)	-	-	-	淡青色 内側刷毛蓋入	-	⑱	甕	SD 2 (L)	(8.0)	-	-	灰山山、朱色 丁度付施色
⑤	+	6-4 SD 2 (L)	-	-	-	-	淡綠色、清 武	-	⑲	甕	1-1 SK 5	(9.0)	(4.0)	2.6	16C 拾手 施色
⑥	+	盤	SD 2 (L)	(26.0)	-	-	唇内、ヘラ 接合部	-	⑳	甕	10-5 S.K.	-	-	-	口端下足込み 17C 後半
⑦	+	皿	5-2 SD 2 (L)	-	16.0	-	見込み輪付	-	㉑	甕	1-4 SD 1 (L)	(10.0)	-	-	唇内料付 16C 後半 中頭
⑧	+	2-5 SD 2 (L)	-	15.0	-	-	見込みに 文様	-	㉒	甕	8-5	-	-	-	唇外付 16C 後半 17C 初頭
⑨	+	2-4 SD 1 (L)	-	10.0	-	-	見込み輪付	-	㉓	甕	2-3 SD 1 (L)	-	(19.0)	-	傾傾手 直立
⑩	+	4-5 SD 1 (L)	-	6.0	-	-	見込みに花 文	14C-15C 4	㉔	口盤 筋跡	5-5 重	-	(11.0)	-	厚唇 16C 後半 中頭
⑪	+	6-5 SD 1 (L)	-	5.4	-	-	見込みに 食合	14 C 末 ~ 15C	㉕	陶器	SD 3 (L)	-	-	-	皿耳付 16C 後半 17C 初頭
PL. 11	青磁	合子	8-2-1	6.0	-	-	灰褐色、口 沿付	現代	㉖	甕	2-3 SD 1 (L)	-	-	-	16C 後半 17C 初頭
②	+	?	5-5	-	-	-	唇内料付 輪付	15C 後半 中頭	㉗	甕	SD 1 (L)	-	-	-	唇傾 唇内側施色
③	+	碗	5-5	(13.0)	-	-	唇内料付 輪付	15C 後半 中頭	㉘	甕	SD 1 (L)	-	-	-	*
④	+	皿	6-4 SD 2 (L)	-	-	-	壁刷毛	-	㉙	甕	10-5 S.K.	-	-	-	16C 後半 中頭
⑤	+	?	各区探査	-	5.5	-	見込みに唇 接合部	-	㉚	甕	6-3 SD 4	-	-	-	16C 後半 17C 初頭
⑥	+	10-6 SD 1 (S)	9.0	(4.0)	2.5	-	唇刷毛 端刷毛	16C	㉛	甕	6-3 SD 2 (L)	-	-	-	唇傾 15C
⑦	+	鉢?	6-3 探査	-	-	-	淡青白色	16C	㉜	甕	6-3 SD 2 (L)	-	-	-	底部
⑧	白磁	杯	2-2	6.0	(1.0)	3.0	上級	16C ~ 17C 滑面	㉖	甕	SD 2 (L)	-	-	-	脣部に垂線
⑨	青磁	碗	5-5-I	7.0	5.5	-	赤内面施釉	-	㉗	甕	10-5 S.K.	-	-	-	内外施、滑 面のナグ
PL. 12	白磁	皿	1-4 SD 1 (L)	-	(4.0)	-	見込みに白磁 内側白磁	15C	㉘	甕	6-3 SD 2 (L)	-	-	-	底付 16C 後半
②	+	+	5-2 SD 2 (L)	B.7	4.5	2.8	淡青白色 内側白磁	15C 磁建	㉙	甕	5-2 SK 2	27.5	13.6	12.4	16C 後半 17C 初頭
③	+	+	5-5-I	-	-	-	端刷毛 口白	15 C 末 ~ 16 C 中頭	㉚	新瓶	5-2	(11.0)	(3.0)	16.0	16C 後半 17C 初頭
④	+	+	10-5 S.K.	(11.0)	-	-	脚付	16C	㉛	甕	9-3	(11.0)	(4.0)	17.0	天目茶碗 執湯器
⑤	+	+	10-7 SD 1 (S)	-	16.0	-	脚付外實人	-							*

表-4 出土遺物観察表

この他、掲載できなかった陶磁器に、舶載の褐釉陶器2片が10-5区(SK1)より検出。これは東南アジア方面で焼かれた可能性がある。また近世磁器では、肥前系の皿などで18C~19C前半のもの、18C後半~19C初頭のソバチヨコ、近世後期の薩摩系の陶器類などが少量出土している。鍛冶・鉄物に關係する遺物として、るつぼ(PL.19)が僅かであるがSK1のI層より出土しており、これには鉱滓が膠着している。その他の土製品では、SK5より紡錘状の土錘4、その周辺より1の計5箇が採集された。

石製品(PL.18)

滑石製の石鍋小片(SD4(S), PL.18)や手砥石類(PL.18)がSD1(L)-2(L)より検出された。材質は砂岩・頁岩・珪石など多様である。この他に、SD2(L)下層より軽石製の板碑残欠部、SD3(L)1次硬化面より同じく軽石製のミニ板碑(口絵5)や宝珠2が出土。SK5覆土内より凝灰岩製の五輪塔の水輪部が1箇(口絵5)、同材質の宝塔を思われる塔身(あるいは五輪塔の変形か)1を検出した。これらはそれぞれ年代差があるが、それについて本報告に委ね、一応前者は14C後半頃、後者は16C前半頃と推定しておきたい。

鉄製品(PL.19)

卷頭釘、武器では鉄鎌(2-3区)・小刀(10-6区Pit内)・鉄製紡錘車(5-2区)などが検出されている。

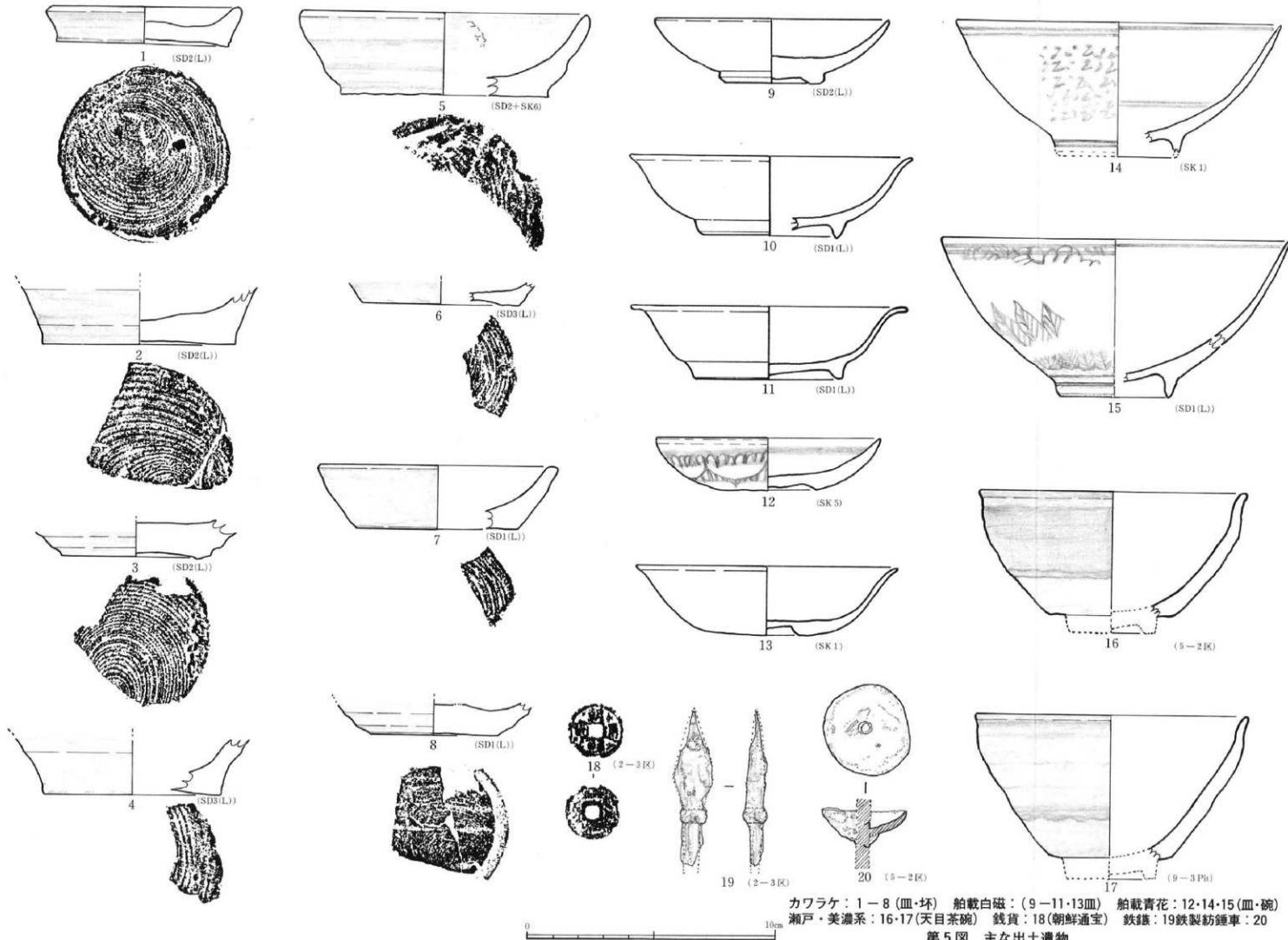
銅製品(口絵4)

煙管の吸口・寛永通宝(以上IV区-I層)・朝鮮通宝(2-3区)・鑄文不明の錢貨、また5-5区II下層よりピンセット状のものがみい出されている。

その他の遺物

赤塗片(口絵4)

SD3(L)の1次硬化面下の覆土より出土した。これは赤塗椀のものが剥落したものと思われる。



第5図 主な出土遺物

III. ま と め

当台地は縄文晩期の土器片・古墳時代の土師器片の出土によって、該期のその利用の微証をえた。その立地が重要視されるのは、むしろ中世に入ってからであろう。以下、不十分ながら検出した遺構・遺物によって、中世を主眼とするおおよその時期の設定を試みることにしたい。

第Ⅰ期 南北に走行する S D 4 は埋土や出土遺物より 13C 末頃のものとみた。またこれとほぼ同時期と推定される S D 2 (L), S D 2 (S) は、当初はセットとして開削され、前者は道路、後者はそれに附属する溝であったと推定する。14C 後半になると S D 2 (L) は溝状に改変されたごとくで、これ以前は道路として機能していたものであろう。

第Ⅱ期 S D 2 (L) は約 2,000m² を内区とする L 字状に開削された館址の堀として掘削されたようだ、これと同時期と推定される遺構は、IV 区 A タイプ埴土の Pit 群（獨立柱建物の掘形）や S C 1 であろう。

これらは文明 8 年（1476）秋の桜島噴火以前は廃絶していたように推察される。ただ歴史的遺構の文明ボラの堆積状況より観れば、この畠はこの直後に廢棄されたものといえよう。

第Ⅳ期 それ以後に S D 1 (L)・S D 3 (L) が開削されたようである。これはとりあえず 15C 代としておくが、16C 前半には埋め戻されたものと思われる。

第Ⅴ期 S D 1 (L)・S D 3 (L) は 16C 末になると、南東縁の虎口と推定される部分より、その通路として嵩あげ変更を加えた跡がある。この時期の他の遺構は、I～V 区の B タイプ埴土の Pit 群（VI 区は獨立柱建物）・S D 3 (S) がある。これとほぼ同年代、さらに台地の周縁を囲い込むように S D 1 (S) が掘削されているが、これは間もなく埋め戻されている。これ以降に IV 区の白色シルトを混ぜる掘形（獨立柱建物）が作事されたごとくで、これはその埋土・遺物より 17C 代と推察される。これよりややあって、18C～19C の肥前系磁器・在地系陶器が確認されるので、この間に S K も含まれたのである。

歴史的にみれば、当地に軍事的、政治的緊張のもっとも高まった永和初年に、「都之城」・「都城」の名称が文献に頻出する（註 1）。この事実と第Ⅱ期が符合する点は見逃せない。またこの形態は該期南九州の城館の一端を伝えるものとして貴重であろう。さらに第Ⅳ期は戦国期の虎口の改変と関連があろうし、V 期は文禄 4 年（1595）9 月？～慶長 5 年（1600）2 月伊集院氏時代にそれぞれ対応するもの（註 2）であり、それ以降の独立柱遺構は、元和元年（1615）閏 6 月の徳川幕府の一国一城令直前の、北郷氏家臣団の一つの存在形態を示すものであろう（註 3）。

都之城の一郭の「取添」はつとに伊集院氏の構築と伝承されるが、この名称が南九州に普遍的であったかどうか詳かでないが、伊集院氏ゆかりの城址に多存している事実は興味深い。

「取添」はおそらく「取り添ふ」の意から出たものであろう。そして「今治」・「新城」などという名称とは本来は区別されるべき曲輪名であったものと思われる。古城址に附属する取添は多く本郭部を防禦するため、台地の辺縁部に新規に構築されたものと考えてよい。外堀の未発達の場合、特に有効であったろう。都之城の場合も本丸の北西縁部に位置する。これは本郭部と「弓場田口」・「鷹尾口」

の防衛を第一義としながらも、伊集院氏の行政機構の拡大や、豊臣政権の地方への権力誇示にも関わっていよう。この事実は本郷部の布堀り・五七桐紋瓦の出土、取添のL字外郭の構成など、それを如実に示している。

因みに、天和古絵図に描かれている「西明寺」は、該地に創建されていたように伝承されるが、北郷義久都之城築城説と共に疑問がある（註4）。また同じく「福荷社」は北郷忠相が天文年間に祭祀したものと伝えられる（註5）。

ともかく今後、当城の有するであろう複雑な性格、機能など歴史考古学はもとより、文献史学の面よりもアプローチし、しかるべき位置づけがなされることを期待したい。

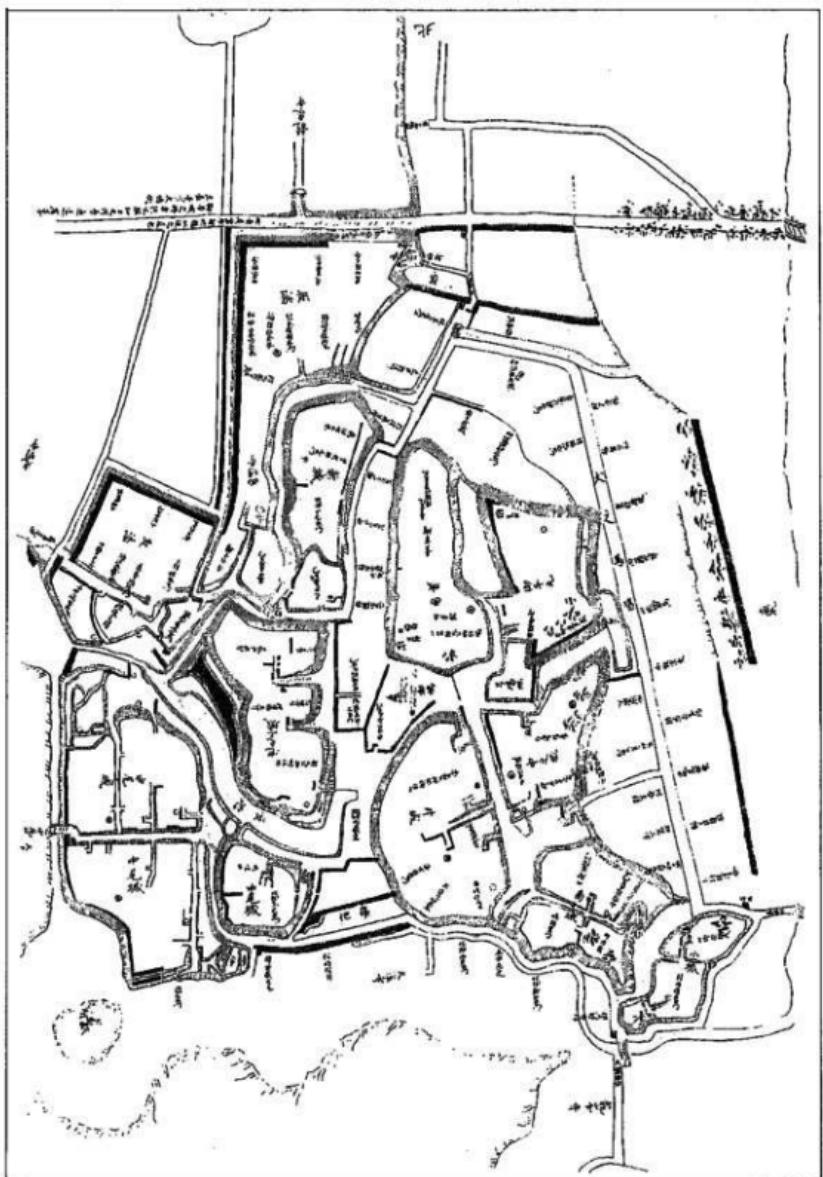
いつも思うことであるが、城郭調査などのように周辺部の巨大遺構の追求と、その安全対策が切望される。最後に本調査に際し、格別のご高配を賜った⁶、また貴重な関連史料のご提供を頂いた⁷に衷心より感謝申し上げたい。また酷暑のみぎり額に汗して発掘作業にご協力を惜しまなかつた方々の労を多としたい。

No	城名(別称)	中世行政区	曲輪名	邦数	本邦よりの方位	出典	備考
1	都之城(鶴丸城)	日向南郷	取添	2	北西線 加塙家所藏 天和2年古絵図	本城 伝伊集院氏築落	
2	山田城	日向北郷	取添	1	南西線 莊内地理志卷之八十四	庄内十二外城	
3	安永城(鶴真城)	日向北郷	取添	1	北東線 莊内地理志卷之七十四	庄内十二外城	
4	梶山城(雄鷹城)	日向三俣院	取そへ(とりそへ)	1	北東線 莊内地理志卷之九十九	庄内十二外城	
5	月山日和城(高城)	日向三俣院	取添	1	—	三国名勝圖会卷之五十七	庄内十二外城
6	觀虎城(北侯城)	日向財部郡 大隅財部郡	鳥添	1	南西線 財部町郷土史	庄内十二外城 財部城	
7	亀鶴城(松尾城)	日向南郷 大隅津河院	取添	1	—	三国名勝圖会卷之三十六	庄内十二外城 本吉城
8	亀鶴城(鹿屋城?)	大隅鹿屋院	取添城	1	—	三国名勝圖会卷之四十七	伝伊集院忠権築落
9	松ヶ城(高原城?)	日向諸原郡	取添丸	1	—	三国名勝圖会卷之五十六	

表-5 日向・薩摩における古城址「取添」一覧表

註

- 1 「山田聖榮自記」・『土持文書』他。
- 2 『島津國史』卷之二十一。拙稿『都城島津家史料』第三卷。拙稿『伊集院忠真受發給文書にみる庄内事変の一鉤』(『南九州文化』18~20)。
- 3 天和2年「都之城古絵図」都城加塙家所蔵。この絵図については、拙稿「日向国庄内に於ける中世城郭について」(『南九州文化』29)。
- 4 「莊内地理志」卷之四。附録の解説参照。
- 5 前掲書。



第6図 都之城縄張り圖(天和2年写、加塙家所蔵本に依り新規に作図したものである)

[附 錄]

1 伊集院忠棟書状（口絵6）

〔白 文〕

比元就難説之儀

進而飛脚被指

上候則伊地知利兵衛尉殿

を以連 上聞候

御念入候儀一段

御祝着之通上意候

先々此元静謐之

躰ニ候可御心易候

將又眼氣出合候

通御書面披見候而

尙入候内々療治

尤候就者御親父

被成遂行御

力落之儀令察候

猶委曲重而可

申談候恐々謹言

九月六日幸侃（花押）

□□□右衛門尉殿

御返報

〔読み下し〕

ここ元難説の儀。進而飛脚指し上され候。すなわち伊地知利兵衛尉殿をもって上間に達し候。ご念入候儀、一段ご祝着の通、上意に候。先ず々、ここ元静謐の体に候。御心やすかるべく候。はたまた、眼氣出合候ふ通り、御書面披見候ふて驚き入り候。内々療治もつともに候。ついては、御親父遂行なされ、お力落しの儀。察せしめ候。なお委曲は重ねて申し談すべく候。恐々謹言。

伊右入（伊集院右衛門大夫入道）

九月六日幸侃

(印) (印) (印)
□ □ □ 右衛門尉殿

御返報

〔解 説〕

この書状は某年の9月6日付で、忠棟より相良新右衛門尉に充てた返事である。口訳すると、こちらの風聞のこと、わざわざ使者を遣わされましたので、すぐさま伊地知利兵衛殿をして主君にご報告しました。ご念の入ったこと格別に祝着に思うぞとのお言葉でした。当方は何事もなくご安心下さい。それにしても、眼病に罹られたとのこと、お手紙を拝見して驚いています。うちわに治療なされることが大切です。また御親父様が死去されたとのこと、落胆のほどお察します。なお詳細は重ねて相談いたしたい。という意味であろう。忠棟の入道は天正15年（1587）6月であるから、本書もそれ以後のものとなる。或いは上洛中の島津義久へ御使役の相良長泰からの連絡と思われ、忠棟の島津家宿老としての一面を伝える。

本書の料紙は楮紙（奉書）で、折紙となっており、祐筆書きである。なお懸紙（封紙）は既に失われている。



（表）



（表）

（裏）

第7図 1号懸紙復元図 2号文書本紙切封復元図

2 伊集院忠真自筆消息 (口絵 6)

〔白文〕

猶々何事も
油断候てハ成間
敷候今度鹿児島
之詰丈なども只今
只今盡參着候

相導候へといつれも夫丸
今朝申置候儀

共不事山中候敵兵財

少々油断候まし

何とて油断候や曲事

く侯家ふきの

迄候へく候此返事

事題申へく候

早々承べく候又

一小川安房へわう

留主中小姓番を

かいの観箱跡多

念入候へく候

作せ候然處わう

七八人程召置候其心得

かい無之由申候即

有へく候留主中

あわひのかい可被遣

小姓共たか祝ひなわの

之事肝要候其

ちきせ有へく候

元へ不有合候者

是も油断候ましく候

志布志などと尋

かたく中候あわひの員の

有へく候方々

事出斯有ましく

所持候へく候

候

彼是延引候

問敷候

一両人之姫大介八右衛門尉

主馬此人衆へ能々可被申渡候

恐々かしく

三月拾五日忠 (花押)

より

東□□右衛門尉殿 源

□□□兵衛尉殿 江

〔読み下し〕

ただいま参着候。今朝申し置き候ふ儀、少しも油断候ふましく候。家ふきのこと題目申すべく候。

一つ、小川安房へわうかいの観箱あまた作らせ候。しかるところ、わう貝これなきよし申し候。すなわち、あわびのかい遣わざるべきこと、肝要に候。其元へありあわづ候はば、志布志などを尋ねあるべく候。方々所持候べく候。かれこれ延引候ふまじく候。

一つ、両人の姫・大介・八右衛門尉・主馬この人衆へもよく申渡さるべく候。恐々かしく。

(追而書)

なおき、何事も油断候ふてはなるまじく候。今度、鹿児島の詰夫などもただいま相尋ね候へば、いづれも夫丸ども不事のよし申し候。勘兵衛尉何とて油断申し候や。曲事迄候べく候。この返事早々うけたまわるべく候。また留守中小姓番よく々念を入れ候べく候。七八人程召し置き候ふあいだ、その心得有るべく候。留守中小姓どもたか尻・ひなわのちきせ有るべく候。是も油断候ふまじく候。かたく申し候ふあわびの貝のこと、油断有まじく候。

(眞)

三月拾五日忠 (花押)

(眞)

東□□右衛門尉殿 (源次郎)

(眞) (眞)

□□□兵衛尉殿 源

(切封の墨痕) 江

〔解説〕

この手紙も年紀不詳であるが、某年の3月15日に忠真よりごく身内の東舞彦右衛門尉・猪俣勘兵衛尉（以上は推定）の両名に充てたものである。内容は、ついいましがた到着した。今朝も申し付けておいたように、少しも注意をおこたってはならぬ。家事の日々はまだ連絡する。1. 小川安房へ大員の観箱をたくさん注文したが、大員が不足すると申してきている。だから鮑を届けることが大切だ。そちらで入手できなければ、志布志あたりで求め持参するがよい。何かと延引してはならぬぞ。

2. 2人の姫や大介・八右衛門・主馬なども手落ちのないよう十分に申し渡すように。とにかく何事も注意を怠ってはいけない。こんど、鹿児島結びのことも、いま訪ねてみれば、人夫どもは仕事をさぼっているというではないか。勘兵衛は何をしているのか。とんでもないことだぞ。この件に関しては早々に聞きたい。また留守中の小姓どもは番を入念にするがよい。7、8人もめしおいてあるので、その心得でいるように。また留守中小姓どもはたか尻（竹尻＝鑑か）・火縄の手入れも致しておくよう。これもぬかりがあつてはならぬ。また先ほどきっと申し付けた鮑のこと、なおざりにしてはあつならぬぞ。という意である。

本文書は楮紙（奉書）を使用し、折紙形式。札紙を切放し封にし、封緘（懸紙）は既にない。珍しい忠真の自筆長文の書状で興味つきないものがある。従来、彼の武勇の反面、つまり非常に繊細な性格が紙面より伝わってくるようだ。花押形態より都城時代のものと推定しておきたい。

3 光明寺本堂定香箱銘写 (莊内地理志卷之七十一)

伊集院右衛門大夫忠棟、爰許御知行之御、為蓮仏房牌處再興畢
貞文祿五年丙申閏七月廿八日、光明寺三代覺阿 (下略)

4 光明寺三宝荒神像銘写 (莊内地理志卷之七十一)

伊集院右衛門大夫忠棟、爰許御知行之御、為蓮仏房牌處再興畢
南無三宝大荒神御尊像
火植那藤原朝臣伊集院右衛門大夫入道忠棟
于時文祿四年己未十一月廿八日

〔解説〕

伊集院忠棟が当地時宗の光明寺の牌所を再興したこと、また同寺境内の三宝荒神像を造立した事実を知る。伊集院忠棟一族関係の史料は殆ど抹殺されているので稀有なものといえ、これによってまた大名による寺院政策の一端も窺知されよう。

5 西明寺梵鐘銘写 (莊内地理志卷之四)

龍奉捨入
日本鷲津庄日州北郷大同山西明寺常住
右志趣者、為天長地久、御願圓滿、文殊大士
為道日惠有領證佛果菩提
次願主住持比丘祐突
保祐、本寺且那知久、
心中所願皆令満足、
應永念三年丙申九月吉日

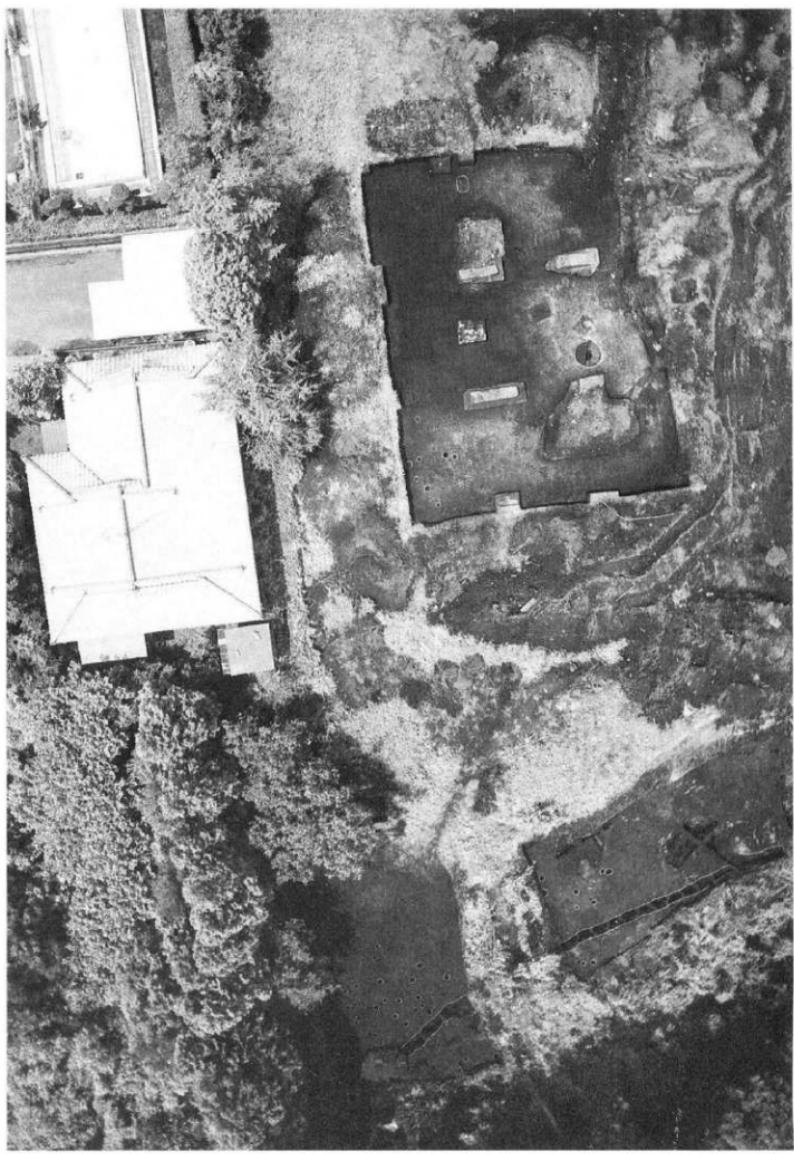
〔解説〕

この銘文の主体は不明であるが、一応梵鐘銘と推定しておく。これは近世まで薩摩國日置郡市來の龍雲寺に所在したことである。

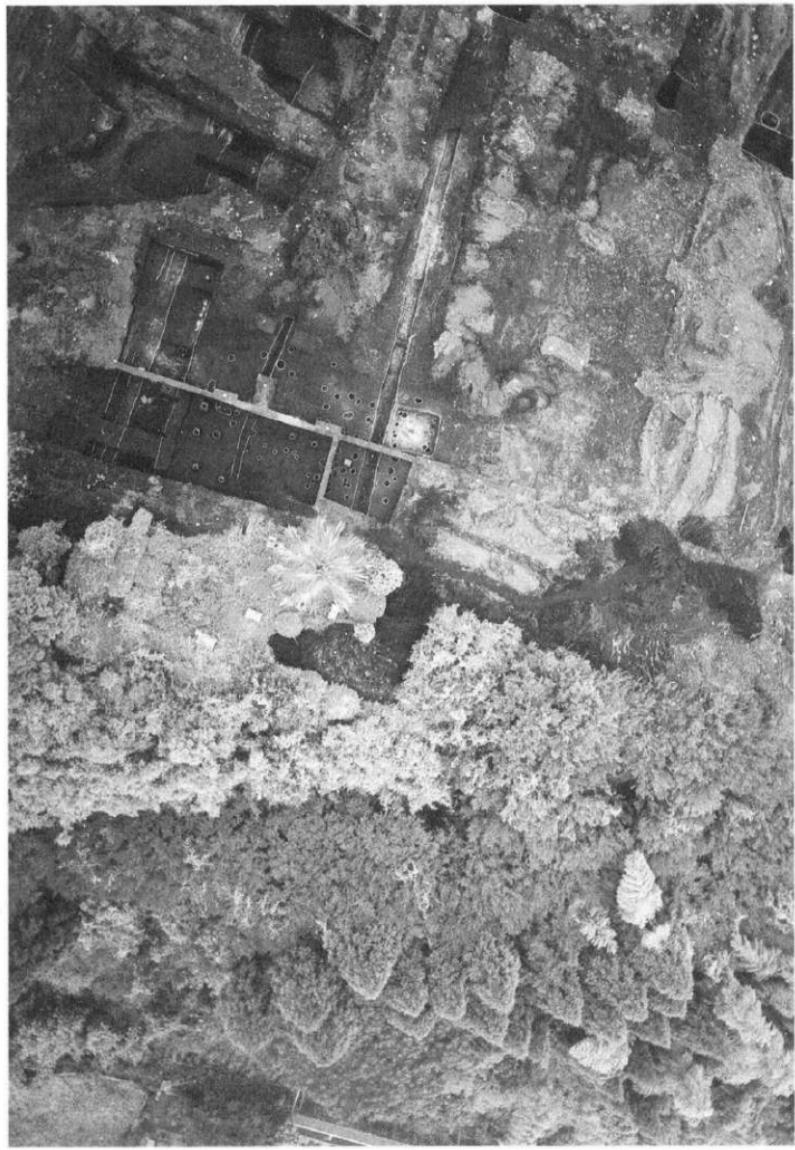
これは応永23年(1416)9月某日、道日恵有の追善供養のため、西明寺住職の祐突らが願主となり、知久が権那となって、併せて施主の心中所願を成就せしめんがために施入したものである。

ここで注目すべきは、西明寺の所在が北郷とみえることであろう。從来、西明寺は創建時より都之城取派に所在していたように伝承されるが、中世該期の都之城は北郷に属していた筈である。ところで、ここに見える「道日恵有」とは誰か。それは次の史料が証明してくれる。

さかのほって応永8年(1401)2月の神柱宮修造棟札写『莊内地理志卷之九十四』に、守護島津元久と「北郷讚岐入道沙弥道旦」が並記されているからである。この人物と既述の人物は同一人であり、北郷氏2代であること論を俟たない。しかし惜しいかな彼の実名(名乗)が不詳である。ただ『島津国史』には該記の項に原據不明ながら「北郷證久」と載せている。彼の存生下限はどうやら応永16年3月まで確認できた(『前編旧記録』巻卅一)。先の応永23年9月の梵鐘は、北郷讚岐守道旦の7回忌に子息の北郷知久らによって施入されたものと思われる。二代北郷氏の没年は通説では不詳とし法名も一致しない。これより逆算すると道旦の死亡年次は「応永17年」と推定されるのである。また寛正元年~文明6年(1460~1474)頃に、「北郷讚岐守義久」なる人が安永の城主として見えていた(『行脚僧雜錄』、『桜山文書』)。この人物は都城島津氏系図には所見がない。おそらくこの代までは北郷氏はやはり北郷に拠点を有していたとみるべきであり、北郷二代義久の都城築城説・二戸寺開基説も、当地中世史の根幹に関わることとして、都城中世史全体に厳正な再検討の必要を迫られる訳である。



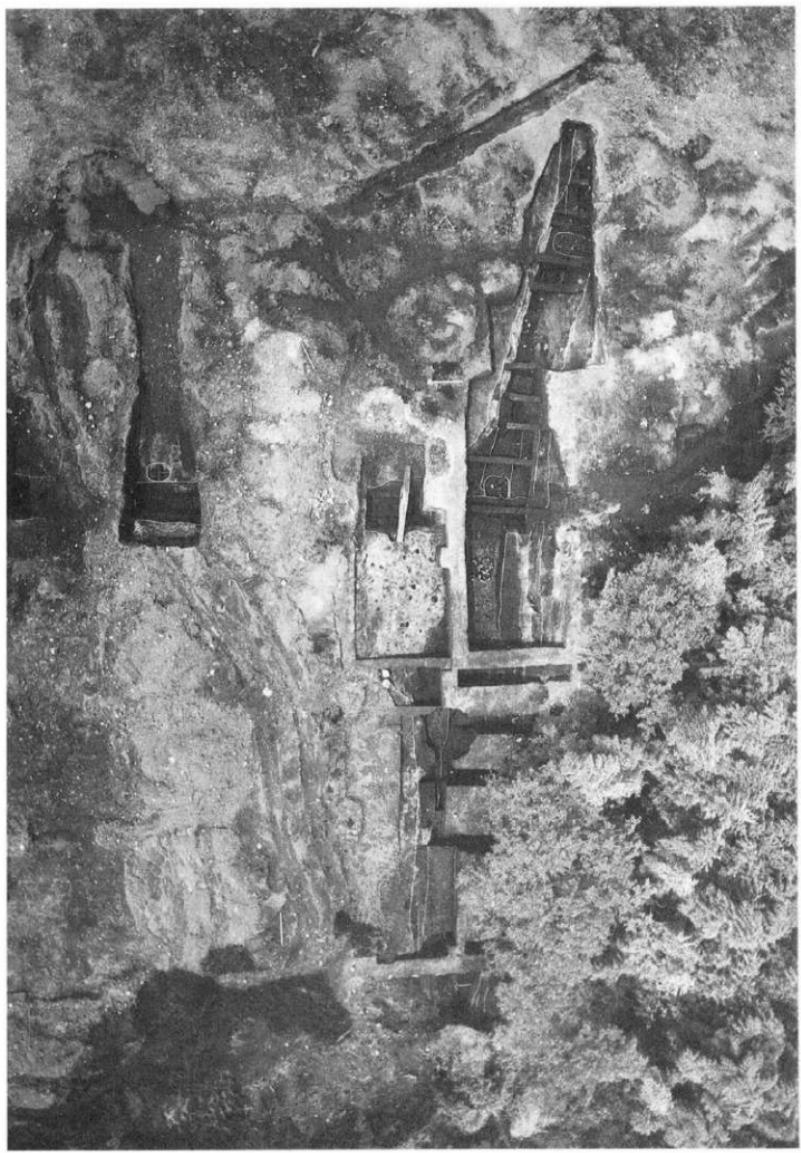
P.L.1 調査区遺構完掘状況航空写真(上：ピット群Ⅰ区), ピット群・溝一1(左下よりⅡ・Ⅲ区)



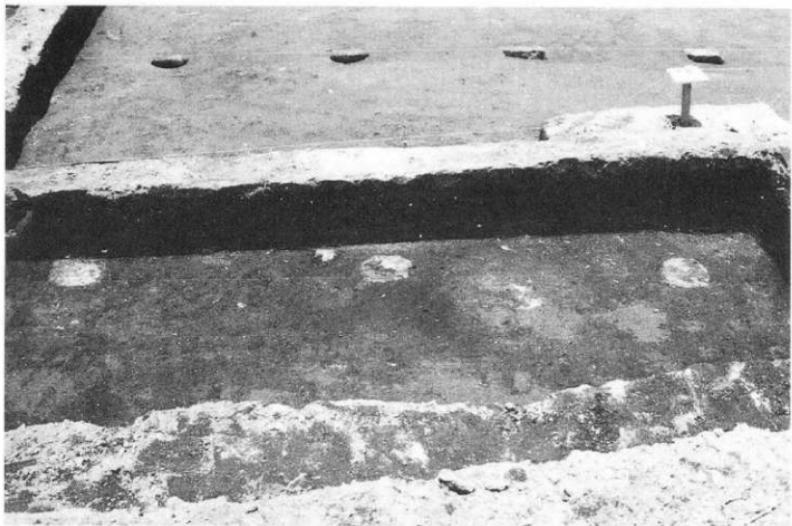
P.L.2 同(溝2・3・4・大溝-2・土坑1・ピット群竪穴遺構-1(IV区))



P.L. 3 同(大溝-2・土坑-2・3(IV区))



P.L. 4 同(大溝-1・2の切り合い, 土坑-4~7・ピット群(V区))



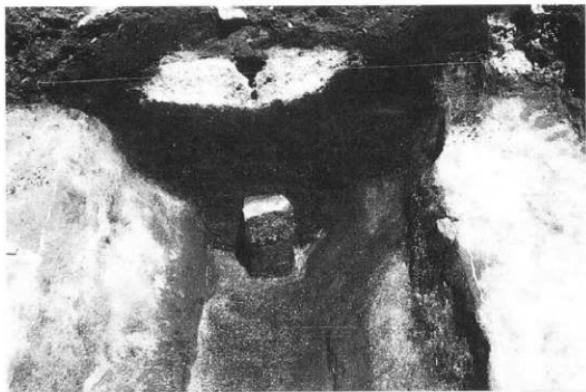
P.L. 5 検出された柱穴列〈IV区〉(上:近世), 煙の歛間に堆積した文明テフラ〈I区〉(中世)



P.L. 6 土坑-5内の集石(V区西側より), 溝-1(III区東側より)



P.L.7 ピット群の検出状況(Ⅰ区南西隅)竪穴遺構-1, ピット群(Ⅳ区東側より)



P.L. 8 大溝-1・2の切り合い、硬化面下の軽石(V区)、下は大溝-2覆土内の板碑残欠部



1



2



3



4



5

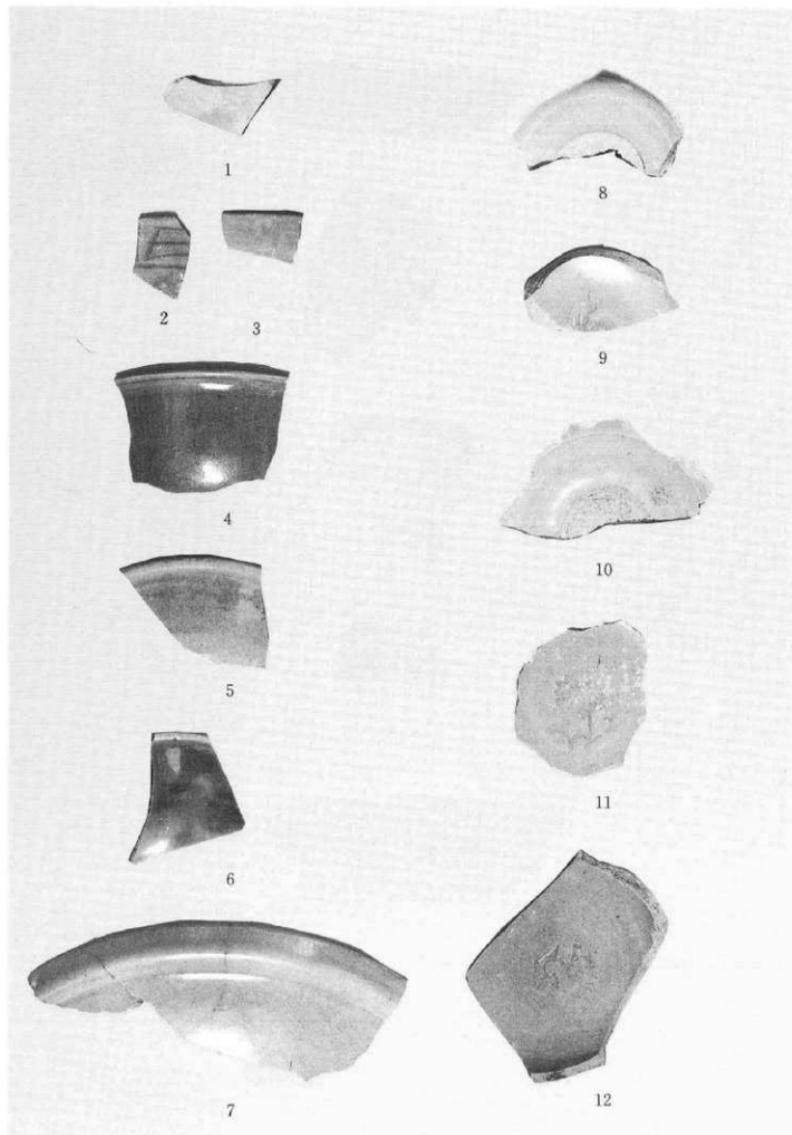


6

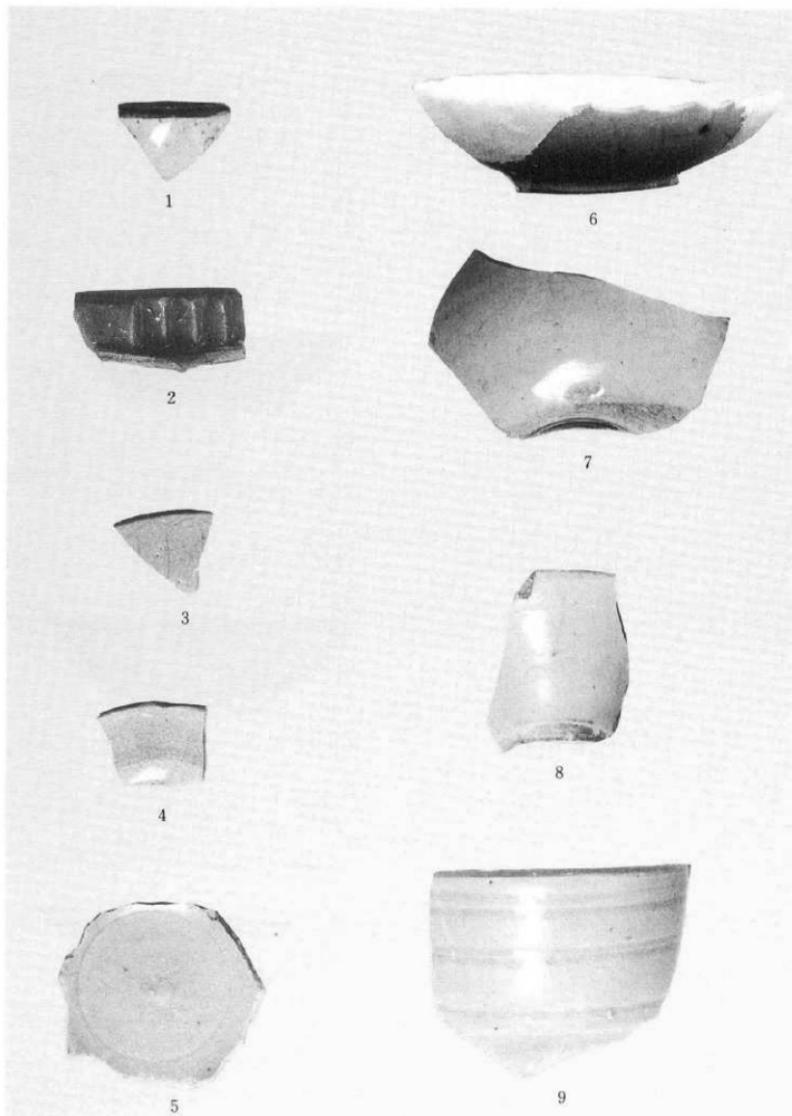


7

P.L. 9 繩文土器・かわらけ類 1・2 (14C 後半), 3・4・5 (15C), 6・7 (16C)



P L.10 出土遺物 船載磁器(青磁)(右上は12~13C, 以下は14C後半~15C中葉)



PL.11 船載磁器(青磁) 1・2(明代), 3~5(15C後半~16C中葉), 6・7(16C), 8・9(16C~17C初頭)



1



6



7



2

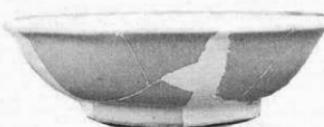


8



3

4



9



5

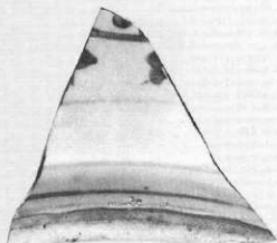


10

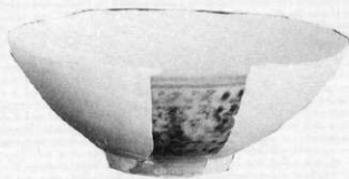
P L.12 船載磁器(白磁) 1・2 (15C), 3・4・5 (15C末～16C中葉), 6・7・8 (16C), 9 (15C末～16C後半), 10 (16C後半～17C初頭)



1



2

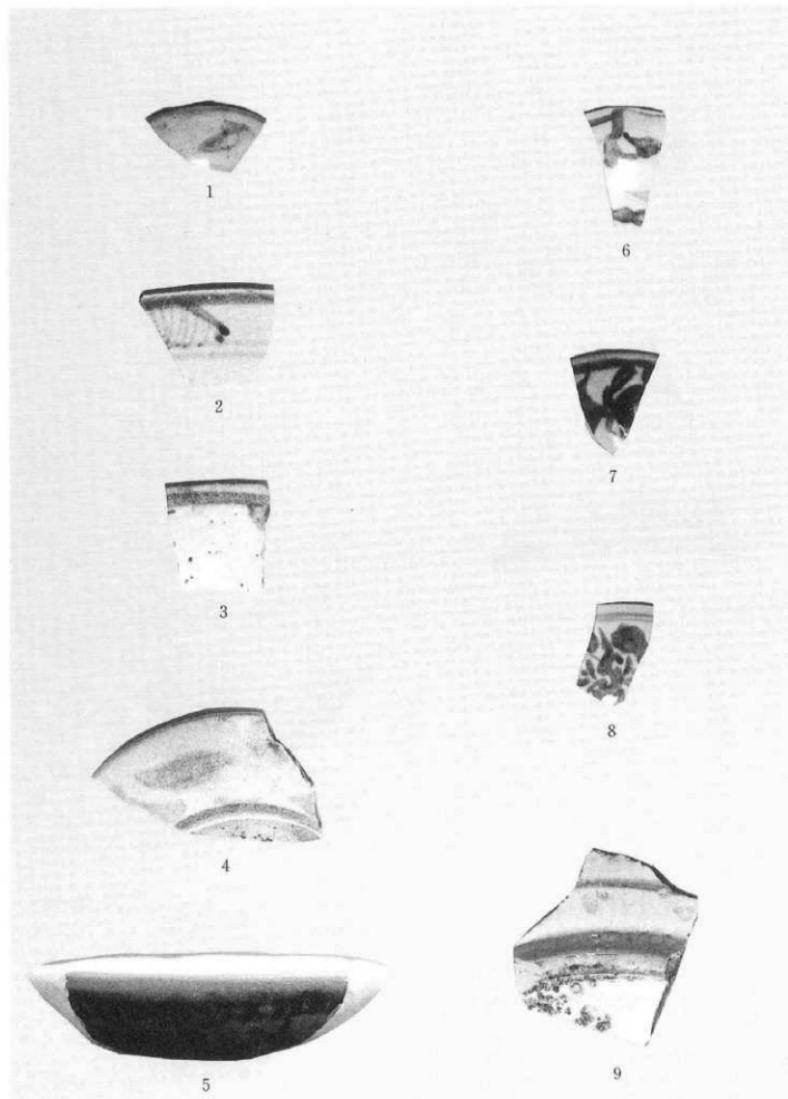


3



4

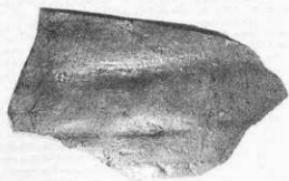
P.L.13 舶載磁器(青花) 1・2 (15C), 3 (15C末~16中・後半), 4 (16C前半~中葉)



PL.14 舶載磁器(青花) 1~5 (16C), 6·7 (16C中葉~17C初頭), 8·9 (16C後~17C初頭)



1



2



3

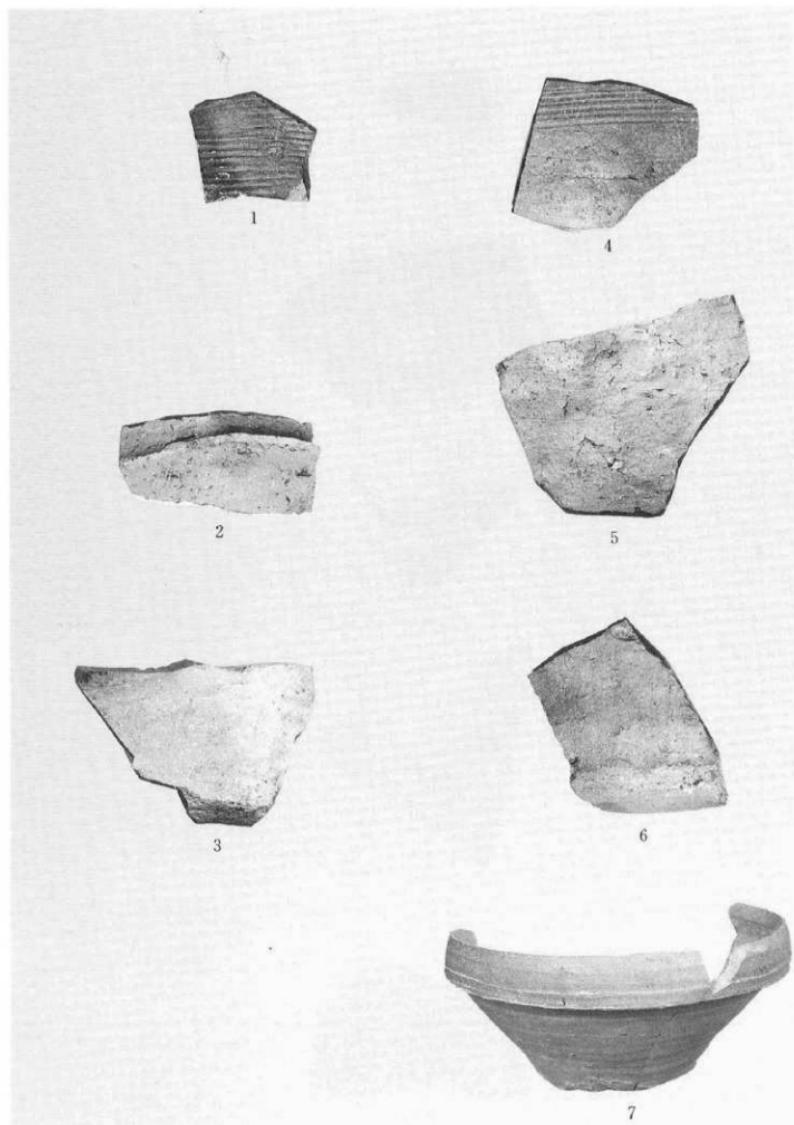


4

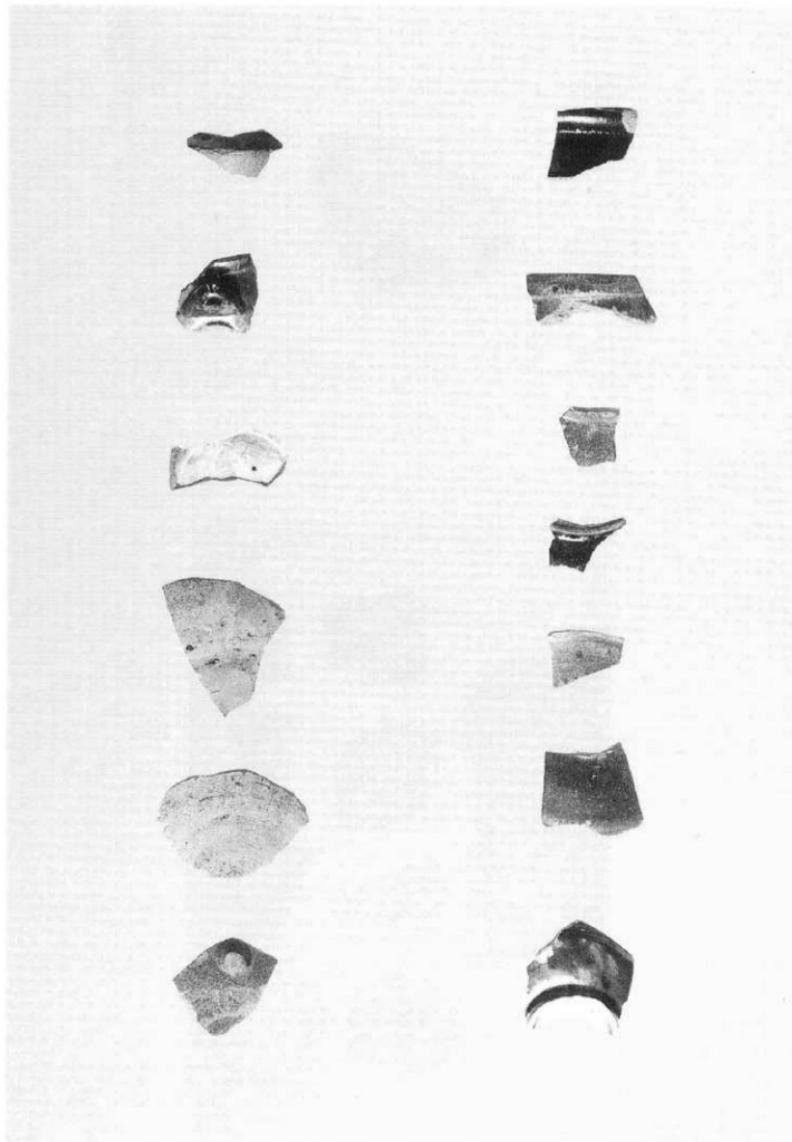


5

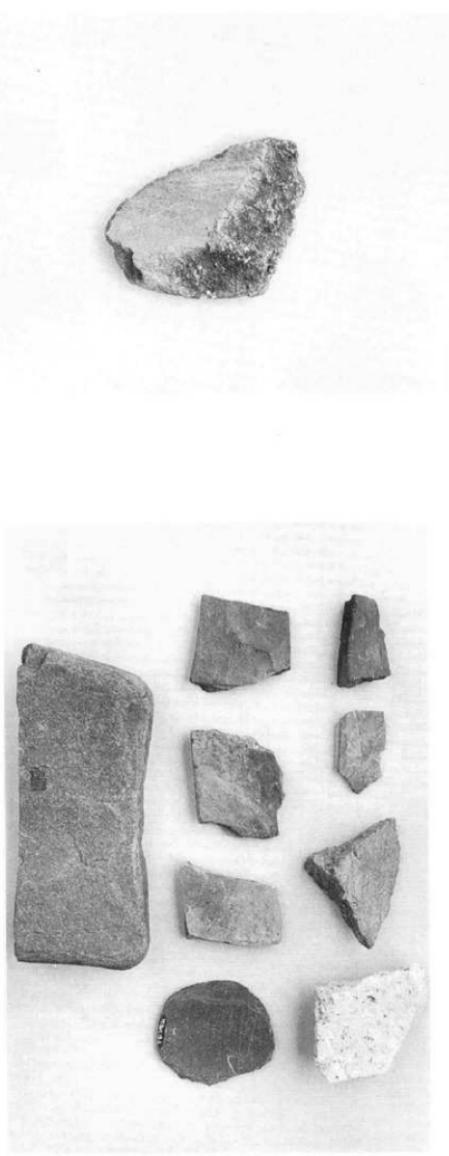
P L.15 舶載陶器(褐釉)明代



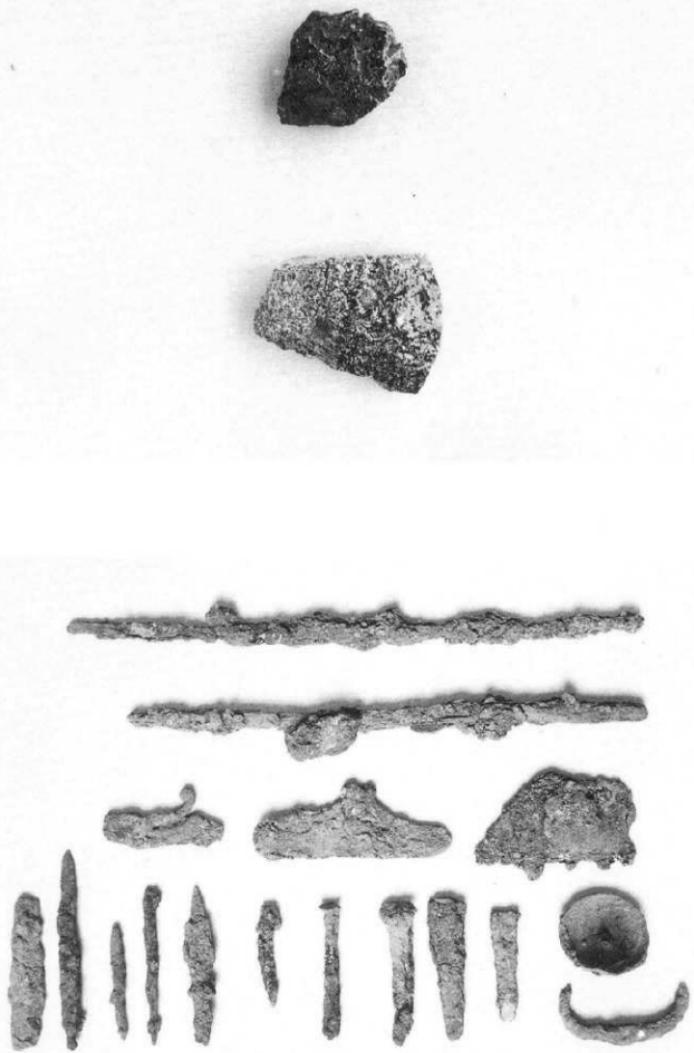
P L .16 陶器類 1 須恵質土器(13C末), 2・3 備前燒擂鉢(15C), 4~6 同要(15C), 7 備前燒擂鉢(16C)



P L .17 陶器類 (在地系 近世)



P.L.18 石製品(上:滑石製石鍋片, 下:砾石類)



P.L.19 るつぼ・鉄製品(釘・鎌・刀子・紡錘車他)

都城市文化財調査報告書 第15集

都之城取添遺跡発掘調査概報

発行日 1991年3月31日
発行 都城市教育委員会

印刷 牧都城印刷